

忍耐



渡辺茂

A decorative horizontal border element featuring a repeating pattern of stylized, symmetrical motifs. Each motif appears to be a combination of a cross-like shape with internal patterns, possibly representing stylized flowers or leaves. The motifs are arranged in a continuous, staggered line across the width of the border.

音がした。それはびんたではなく、そ
っと、さわった程度のものだった。私
は思わず先生の顔を見上げた。先生の
目は慈愛に満ちていた。あとで思った
のだが、階下にはおそらく家主の村長
さんが居合せたのだろう。私は以前か
ら先生を尊敬していたが、それ以来、
ますます先生が好きになつた。先生の
授業は質素で素朴なものであつたが、
勉強することの喜びと楽しさを教え、
充実を感じさせるものであつた。今様
にいえば、そこには手作りの教育があ
つた。それはしばしば私たちの寂しさ
を忘れさせたものである。

さて、はなしを現在に戻すことにすこし入生を加えて昭和五十五年度のスタートである。ところで今年の入試の国語の問題に「忍耐」をテーマとして作文が出題された。聞くところによると、ある高校では、試験中に手をあげて、「先生、これ、なんと読むんですか」と質問した受験生がいたそうである。私はこれを耳にしたとき思わず吹き出しちゃった。しかし、まさしく時代を

感じ、その生徒があわれにさえ思えたのである。そこで私は本校の国語の先生がたに、どんな内容のものが多かつたのか尋ねてみた。その返答は「勉強」であった。そうです、耐えがたき

というのである。もちろん、作文として他の条件を具えていれば満点が与えられたであろう。しかしながらかおかしい。

なにかが転換されているようと思えるのである。中学三年生が限られた時間の中とっさに脳裏をかすめたものをおもにして作文をまとめるのだから仕方がないともいえる。しかし勉強とは忍耐に忍耐を重ねてするものであろうか、私は高校時代に英文解釈で学んだ短文を思い出した。「したくないことを、いやいやすることほどからだにわるいものはない」もちろんこの短文を学生にじかに伝えるのは危険であるかも知れない。「勉強したくない教科はしない方がよい、すれば勉強などやりたくないものはやらない方が健康的だ」などと誤解されそうだからである。私はこの短文は勉強とは、したいからするものであり、いやいやするものはではないということを訴えているものだとと思う。「勉強なんて、したくてする人はいない、しなければならないものだ」はいい、しなければならないものだから遊ぶのを我慢して勉強しなければ思ふ。などと人間が本来もじめ合わせるところの知識欲をみずから遮蔽してしまうような言い方は慎まねばならないと思う。

太平洋戦争もいよいよ大詰みの昭和十九年、私は横浜市内に住む両親と別れて箱根の仙石原にいた。いわゆる学童疎開である。当時小学校（国民学校）四年生の私たちは、疎開したものの中では最年少組であったためか男女あわせて百人が家庭的な村長さんのお宅にてお世話をになった。

上級生三百人は仙郷樓という温泉旅館で過ごしていた。末子であまえん坊の私は今は亡き母と別れて暮すことは実に寂しく切ないものであった。おんの子たちは、夜になると家に帰りたいと泣いてだだをこね、先生がたを困惑させたものである。事実、登山電車の線路すたいに脱走を試み、警察の手でつれ戻されたものもいた。そのうえ食糧事情はきびしく、わずかなご飯を

長時間よく咬んでたべた。『飯があるものだと、そのとき初めて知った。そんな中で、私たちの父親がわりとしてお世話を下さった金子先生のことは今でも忘れない。

あるとき私は、二階に通ずる階段を昇るのに、わざと足を踏みしめてどすんどすんと大きな音をたててみた、無

あるとき私は、二階に通する階段を昇るのに、わざと足を踏みしめてどすんどすんと大きな音をたててみた。無意味なただのいたずらであった。間もなく先生が階下から大声でどなりながら昇つてこられ、心あたりのものは前で見るよりといわれた。いがぐり頭の四人が先生の前に並んだ。私は他にも仲間がいたのちよつとびっくりした。先生はびんたを始めた。私はこわくて下を向いていた。自分の番になつた。先生は大きな左手に私のあごをのせ、右手で軽く頬を打つた。かすかな笑